



#28

# クライマックス・キャット!

著：藍澤たすく  
イラスト：かもめ遊羽



「ワシを呼び出したのはお前か……」

「ええ、そうよ……！」

しかし彼女はスカートの裾<sup>すそ</sup>をぎゅっと握りながら、なんとか虚勢<sup>きよせ</sup>を張つてそう応<sup>こた</sup>える。

ここで負けては元も子もない。

「一日は目の前の魔法陣<sup>まほうじん</sup>の上に浮かぶ、山羊<sup>やぎ</sup>顔に角の生えたベタな悪魔<sup>にじら</sup>を睨みつけながら、言葉<sup>ごんば</sup>を接いだ。

「お、お前は召喚者<sup>しようかんしゃ</sup>である私の願いを聞く……のよ……ね？」

言葉の後半に若干弱気な感じが出ているのは一日も自覚していた。

何しろ付け焼き刃である。

今日駅前でティッシュと一緒に配られていた「サルでもできる悪魔召喚術入門」なるインチキくさい小冊子に従つて、ダメモトで部屋の中に魔法陣を敷き、召喚の呪文を唱えたらこいつが出てきてしまつたのだ。青天<sup>せいてん</sup>の霹靂<sup>へきれい</sup>もいところである。

小冊子には、召喚した悪魔に隙<sup>すき</sup>を見せるとそのまま喰<sup>く</sup>られてしまう的な怖いことも書いてあつたので、一日はもう内心ガクブルだつた。

「いいだろう……だがお前の願いを聞く為にはそれなりの代償<sup>だいじょう</sup>が必要だ」

（キターーーー!!）

「一日は緊張に身を強ばらせた。

なんだろう、願いを聞く代わりにお前の魂<sup>たましい</sup>をよこせとか、生き血<sup>すす</sup>を啜らせよとか、処女<sup>しょじょ</sup>を捧げよとか、そういうことだろ？<sup>う</sup>か。はつきり言つてどれもイヤだ。超絶にイヤだ。内心、激しく動搖<sup>どうよう</sup>しながらも、固唾<sup>かたず</sup>を飲んで一日は悪魔の次の言葉を待つた。

「——猫に好かれる」

「は？」

「ワシがお前の命令を聞く代償としてお前は猫に好かれることになる。それでもよいか？」

「猫つて、あの猫？」

「そうじや」

「ニヤーって鳴いて、毛がもふもふで、肉球がふにふにな？」

「それ以外にワシは猫というものを知らぬ」

「なんだそりや。

それが一日の率直な感想だった。

でも元々犬よりは猫が好きだし、猫に好かれたところで何の問題もない。というかむしろウエルカムである。

「構わないわ。猫に好かれても」

「では願いを申してみよ」

そう言われて一日はたじろいだ。

「……になりたい」

「なんじや。聞こえぬ。もつとはつきりと申せ」

「一条先輩の彼女になりたい！」  
や け ぎ み

一日は自棄気味にそう叫ぶと、すぐにベッドの枕に顔をうずめ、ぶるぶると身悶えし始めた。

「汝の願い、しかと聞き届けた」

「え？」

「明日、お前が告白すればその願いは必ず叶えられるであろう」

「ほ、本当に!?」

山羊頭の惡魔の  
目間みけんに采と、彼かれが剥むまれこ。

「た、ただし？」

「猫に好かれる」

それはさつき聞

は消えたあとだつた。

「ふ～～～～」

い。  
とりあえず召喚した悪魔が無事帰つたことに一日は安堵した。これで魂を喰われる心配もな

【……でもほんとかなあ……】

あこが  
一日は魔法陣をなぞりながらため息をつくいた  
憧れの一条先輩。

テニス部のキャプテンで、生徒会長も務め、学校中知らない者はいないスポーツ万能学業優

秀のハンサム・ボーキ。

そんな先輩が果たして自分の告白を受け入れてくれるのかどうか  
考へれば考へるほど弱氣になつてくる。

「にやー」

そこに香田家の飼い猫であるトラ縞のジゴロウが入ってきた。ジゴロウはすりすりと一日の足にすり寄つて甘い声で鳴いている。

一日はジゴロウを撫<sup>な</sup>でながら心にしつかりそう誓<sup>ちか</sup>うのだった。

「一日ー、早く起きなさいよー、あたしまで遅刻しちゃうでしょーー！」

「え？ あつ、もう8時？！ もー、なんでももと早く起こしてくんないのよーー！」

「もう何回も起こしたわよ！ 毎度のことだけど、あんた、ほんと起きないわねーー！」  
呆れた様子でため息をついているのは一日の姉・永遠とわだつた。一日と同じ学校なので、いつも一緒に通学している。

「ほら、さつさと着替えて顔洗って！ あと5分以内に支度しなさいよーー！」

「えー、そんな無茶なーー！」

◆ 「ふいつてきまーーーす！」

一日はトーストをかじりながら玄関から飛び出した。

「もう一日、みつともないから早くそれ食べちゃいなよーー！」

「わはつてふわよーーもぐもぐー！」

若干眉間に皺を寄せながら注意する永遠に、一日は面倒くさそうに応える。

◆ 「にやーーー！」

ふと足許から耳慣れた鳴き声がした。

見るとそこには隣の家のミケがいた。

「なに、ミケ？ お前もパン食べたいの？ よし、はい！」

「ちよつと一日、勝手に人ん家の猫にエサやらない方がいいよ。ついてきちゃつたらどうするのよ？」

「大丈夫、大丈夫。うふふ、可愛いーー！」

一日はトーストを食べるミケの頭をふわふわと撫でた。

「ほら、一日！ 遅刻しちゃうから早く行くわよーー！」

◆ 「はーい」

◆ 「うわつーーー！」

角を曲がった一日は思わず声を出して驚いた。

目の前の空き地に20匹ほどの猫がたむろしていたからだ。

「……猫の集会？」

噂には聞いたことがあるが、果たしてこれがそうなのだろうか。記憶が確かならば猫の集会というものは人間に見つからないように深夜にやる……といったようなことを聞いた気がするのだが……。

「ほら、一日、寄り道しないー」

「あ、ごめん永遠姉、あつ……!?」

いつの間にか足許に真っ白な猫がすり寄ってきていた。

(――ただし、猫に好かれる)

不意に悪魔の言葉が脳裏に甦った。

「確かにいつもより好かれてるわね……って、えええええ!?」

気がつくと集会メンバーの20匹ほどの猫、すべてが一日の周りに集合していた。

「ちょっ！ 何やつてんのよ、一日！ 遊んでる場合じゃないでしょ！」

「え？ だって、あたしがやつてるわけじゃ……きやあああ!?」

一日は思わず悲鳴をあげた。

近隣の家の屋根から猫がどんどん降りてきている。

まるで降り注ぐ猫の雨のようだ。

そして地上に降り立つた猫は一匹残らず一日の周りに集まつていく。  
やがて一日を中心には200匹ほどの猫が大集合していた。  
この町の猫がすべて集まつたのではないかという状況だ。

「どどどどどういうこと？」

「あ、あたしにもわかんないわよー！」

「にやつ！」

猫の鳴き声の喧噪の中でも、一際大きな鳴き声が響いた。

「ジゴロー！」

そう、それは確かに香田家のジゴロウさんだつた。

ジゴロウは何やら力強い声でにや！ にや！ と一日の周りの猫に指示を飛ばしている。

やがて一日の後ろに五列縱隊できちんと並ぶ猫の行列が出来上がつた。

行列の先頭にいるジゴロウはその様子を満足気に眺めると、一日の方を振り返つてにやあと鳴いた。

「え、つと……なんだか判らないけど、ありがとうジゴロー……」

ジゴロウは我が意を得たりとばかりに、一日の足にすりすりするのだつた。

「あんた、もしかしてそのまま学校入る気……？」

「そのまま何も、あたし何もしないもん……」

結局一日は猫の行列を率いたまま、学校のすぐそばまでやつてきていた。これではまるでハーメルンの笛吹きだ。あつちは不ズミだけど、あと気のせいか先ほどより猫が増えているような気もする。

「あたしやだからね、猫まみれの妹と一緒に登校なんて！」

「そんなこと言つてもしようがないじゃな……あつ!?」

「一日は息を呑んだ。

道の向こうにクラスメイトの茅野樹音がいる。

そして彼女もまたその背後に猫の大行列を率いている……！

恋する乙女達は一瞬で理解した。

すなわち、「相手が恋敵である」という事実を。

「あなたも一条先輩を……？」

「あなたも悪魔を呼び出したのね……」

一日と樹音の間に冷たい空気が張りつめた。

「一日……？」

不安そうに妹を見つめる永遠をよそに、一日の思考回路はフル回転していた。

（きっと樹音もあたしと同じ契約を悪魔と結んでいる……だつたら先に告白されたら一巻の終わりじゃない……でも一体どうすればそれを防げるの……!?）

見つめ合つたまま動かない一日と樹音。先に動いた方がやられる……！

やがて異変が起きた。

一日の後ろにいた猫達が次々と樹音の後ろに移動を始めたのだ。

「ちよつと……！」

一日の止める声も聞かず、猫達は次々と樹音の後ろについていく。

思わぬ猫の大移動に登校中の生徒たちから、驚きとも動搖ともつかぬ声があがる。やがて一日の後ろに50匹ほど、樹音の後ろに50匹ほどの猫の行列が形成された。

「ふ……」

樹音が勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「な、なによ!?」

「まだ判らないの、香田さん？ この猫の数は想いの強さに比例している……つまりわたしの方があなたの10倍は一条先輩を愛しているということよ！」

「なつ……」

樹音の衝撃的な宣告に、一日はがつくりとその場に膝をついた。

確かに一日より樹音の方がより「猫に好かれてる」……！

それは事実……庄倒的……庄倒的事实！

「判つたら大人しくそこであなたの告白を見守ることね」

「させないわ！」

「一日は立ち上がり、キツとした表情で樹音を睨みつけた。

「あたしは……あたしの一条先輩への想いがあんたに負けてるなんて認めない！ いいえ、負けてるはずはないわ！ あたしは世界の誰よりも一条先輩を愛している！」

「にゃーーーーー！」

ジゴロウが一日の背後で一際大きな鳴き声をあげた。

それをきつかけに猫達が一斉にキラキラと輝いた瞳で一日を見上げる。

やがて樹音の後ろにいた猫達が一日の後ろにわらわらと戻り始めた。

「ちょ、ちょっとお前達待ちなさい！」

樹音の制止も虚しく、今度は一日の後ろに50匹ほど、樹音の後ろに50匹ほどの列が出来上がる。

る。

「ふつ、どう？ 猫達はどちらの愛が本当に強いか、判つてくれたみたいよ？」

一転、今度は一日が勝ち誇った表情で樹音を睥睨する。

「くつ……こうなつたら仕方ないわ……」

「!?」

樹音が鞄からおもむろに何かを取り出す。

それは……マタタビだつた！

「にゃーーー！」にゃーーー！」にゃーーー！」にゃーーー！」にゃーーー！」にゃーーー！」

今度は雪崩を打つて樹音に猫が殺到する。

「こ、こら、お前達待つて！ あ、ジゴローまで！」

あつとという間に一日の後ろには猫が一匹もいなくなつた。

見ると、ジゴロウは樹音の持つマタタビにうつとりと顔を寄せている。

「そ、そんな汚い手を使ってあなた恥ずかしくないの？！ 人としてどうなのよ？！」

「甘いわ！」

「どんな手を使っても愛しい人を手に入れる……それが真の愛だわ！ それができないのは愛が足りない言い訳に過ぎない！」

「……えう……ならあたしにだつて考えがあるわよ……」  
「一日がゆつくりと鞄に手を差し入れたその時。

「やめないか、君たち！」

「「一条先輩!?!」

一日と樹音憧れの一条豊<sup>ゆたか</sup>が不意に現れた。

しかもその背後に大量の猫の行列をともなつて。

「先輩……」

「まさかそれは……」

驚愕に目を丸くする一日と樹音。

やがて豊はゆつくりと一日の元に歩み寄つた。

「えつ……」

あまりの展開に一日は言葉を失う。

これつて……これつてまさか……。

「香田さん、好きだ」

豊の口から紡<sup>む</sup>がれた单刀直入な愛の告白が一日の心臓を貫いた。

同時に周りの女子生徒達からきやー！ という黄色い歓声があがる。

あまりの事態に樹音は完全に思考停止状態で固まっていた。

「初めに見た日からずっと好きだつたんだ。……でもどうしても告白する勇気がでなかつた……」

一日は胸の前で手を組んでぎゅつと目を瞑<sup>つむ</sup>つた。

（そうか……そつだつたんだ……一条先輩も……一条先輩も……あたしと同じ気持ちだつたんだ……）

「どうか、僕と……」

「はい！」

「どうか、僕とつきあって下さい！ 香田永遠さん！」

「はい！ つて、ええ?!」

豊の熱い視線の先には、一日の隣に立つていた永遠がしっかりと捕らえられていた。

「……あたしで良ければ喜んで」

「本当かい?! 良かった……良かったーーーー!!」

喜色満面といった様子で永遠の手を握る豊。

やがて二人はそのまま手をつないで校舎の方へと歩いていった。

その後に続くのは猫の大行列。

一日と樹音の後ろにいた猫達も加わり、それはもう千匹近い数になつていた。

ぼうぜん

あとに残されたのは呆然と立ち尽くす一日と樹音だけ……。

「コレ、タベル？ ケツコウ、オイシイヨ」

「ウン、アリガトウ」

一日は樹音がそつと差し出したマタタビを口に含んだ。  
それはほろ苦い、失恋の味しかしなかった……。

おしまい